# 根源的生命

小林　道憲

# 根源的生命

小林　道憲

（日本の哲学者）

人生は、生死に迷い、煩悩に惑わされ、罪悪に悩まされる一生だとも言える。自己自身のこのような問題が自覚され、大きく問われる時、宗教的探究心は起きてくる。そして、死や苦や罪の問題を深く自覚し、そこを突き抜けて、仏の慈悲や神の愛に包み込まれる時、宗教的な解脱や救いはある。特に、自覚型宗教は、宇宙の根源的場に自己自身を放棄して、その働きが自己自身の内に内在していることを自覚することによって、解脱や悟りを得ようとする。この論文では、解脱や悟りと言われる宗教的自覚の場に開かれてくる世界観を記述し、生きとし生けるものの中に宿る宇宙の根源的生命の働きを見ている。

## 宇宙生命

どの宗教も、宇宙の根源的力への依存を表明している。だが、宇宙の根源的力は目に見えるものでもなく、形あるものでもない。それでいて、それは万物を生み出し、われわれを内から支えている偉大な力である。宗教とは、この宇宙の根源的力への畏怖の念であり、われわれがそれに全面的に依存しているということへの自覚と信念である。

仏教は、仏陀をも衆生をも支配する真理として、法（dharma）というものを立てる。この法こそ、宇宙の根源的力を意味している。法は、目にも見えず、形もない宇宙の根源的生命である。この根源的生命に生かされてあるということを深く自覚すること、法に生かされてあるということに目覚めることが、解脱や悟りというものである。

大乗仏教では、この法を、また、仏の身体としてとらえ、法身（ほっしん）というものを考える。法身は目にも見えず、形もなく、色も姿もない。法身とは、色も形ももたない宇宙の根源的な力であり、それでいて、同時に広大無辺な働きをする宇宙の根源的生命力である。それは、目に見えないものであるが、全く何もないものではなく、無限の働きをする。

法身が目にも見えず形もない働きだという面に注目すれば、それは空だとも言える。しかし、この法身が単なる空であるのなら、なんの働きもしないであ

ろう。宇宙の真理である法身は、逆に無限の働きをなし、万有を万有たらしめている働きである。宇宙生成の根源力は目には見えないが、無尽蔵な働きであるということを、大乗仏教の法身という考えは表現している。

真言密教が考える自性法身（じしょうほっしん）は、現象界に存在する一切のものの本来の姿を意味し、時間・空間に制約されない絶対的真理を表わしている。この自性法身こそ、宇宙の根源的生命を表わすものと言えよう。しかも、この自性法身も、すぐさま別の種類の法身となって、衆生を済度すると考えられている。大乗仏教では、一般に、法身から種々の働きをする諸仏が現われ出てくる。宇宙の根源的生命は宇宙万物の中に現われ出て、それらを成り立たせているのである。

法身は非人格的な宇宙の根源的力を意味するが、これが人格性をもったものとして表象されると、如来となる。かくて、如来は不生不滅であり、増大したり減少したりせず、輪廻することもないと考えられる。宇宙生命は永遠不滅とみられたのである。しかも、如来の真理は、言葉で言い表わすこともできず、人間の力で知ることもできない無限の力と考えられる。

さらに、『華厳経』（如来性起品（にょらいしょうきぼん））の語るところによれば、如来の活動領域は無辺（むへん）であり、何一つ遮（さえぎ）るものもなく、清浄・無量である。また、如来の知慧の及ぶ対象も無量であり、その領域も限りない。如来の神通力も無礙（むげ）・自在に働き、一切衆生に及び、これを利益している。如来の不可思議な知慧の光明は無限に衆生世界を照らし、如来の見る目は限りがなく、すべてを知る。如来の悟りの内容とその働きは、無量無辺であると言われる。宇宙生命の働きは万物に及び、広大無辺なものと考えられたのである。

如来は、大乗仏教の各経典によって、様々な名で呼ばれている。『華厳経』では、如来は毘盧遮那仏（びるしゃなぶつ）または盧遮那仏（るしゃなぶつ）と呼ばれ、宇宙生命そのものを象徴している。毘盧遮那仏は無限の宇宙そのものとして現われているが、それ自身は目にも見えず形もない法身仏であるから、毘盧遮那仏自身は説法をするということはない。だが、毘盧遮那仏は、光明遍照とも訳されるように、蓮華蔵世界（れんげぞうせかい）に住み、無限の光明を宇宙全体にあまねく及ぼして、これを浄化する如来とされている。毘盧遮那仏の知慧の光明は、広大無辺の宇宙の全方向に及び、それに照らし出されないところはない。われわれ衆生は、この毘盧遮那仏の知慧の光明に照らし出され、その無限の働きに包まれて多くの働きをしており、いつも

毘盧遮那仏のただなかに生きている。そして、われわれは、そこから出て働くとともに、常にそこへと帰っていく。毘盧遮那仏は、われわれ生きとし生けるものがそこから生まれそこへと死していく宇宙の大生命なのである。

この毘盧遮那仏は、密教の奉ずる『大日経』では大日如来となるが、大日如来も宇宙の大なる生命を象徴することに変わりはない。大日如来は、地水火風空識の六大からなる宇宙そのものを身体として、ありとあらゆるものを包含する不生不滅の永遠なる人格体である。この大日如来も、知慧の光明をあまねく発し、すべての生きとし生けるものに平等に慈悲を注ぐ。その活動力は無限であり、種々の仏身となって説法し、衆生を救う。大日如来は、真理を体とする法身仏であるから、永劫の中に時・場所を越え、永遠の真理を説き示す。それは、偉大な教化力と生命力をもった宇宙の無限の働きなのである。

『法華経』の本門の中心をなす「如来寿量品」に説かれる久遠実成の仏も、宇宙の永遠の生命を象徴するものである。「如来寿量品」によれば、釈迦牟尼仏は現世に現われた仏の姿であって、本当の仏は永遠の過去にすでに悟りを開き、以来、衆生を教化し続け、永遠である。本仏の寿命は無限であり、時間・空間を超え、不生不滅である。本仏は人間の目には見えないが、その神通力は、この世界のすみずみに働き出ている。われわれは、この久遠実成の仏の大生命に生かされている。『法華経』の説く永遠の生命をもった久遠実成の仏は、宇宙の永遠の生命そのものなのである。

### 楽土と仏身

われわれは、日常、目前のことに煩わされ、常に何事かにかまけているから、日常の生そのものの中に偉大な宇宙の力が働き出ていることには気づかない。むしろ、われわれの生は、生死に迷い、老病に苦しみ、煩悩に振り回され、怒りや憎しみや怨みに惑う生である。しかし、だからこそ、また、人間はそれを自覚し、この世を苦と汚辱に満ちた世界として思い描くとともに、この世の生を越えたところに、生死を脱し苦を超越した世界を思い描く。かくて、人間がこの世の無常と苦とを自覚して以来、この世とあの世、此岸と彼岸、穢土と浄土の相対立する二つの世界が、われわれの心の中に立てられるに至った。そして、此岸はますます汚濁に満ちたものとして想像されるとともに、彼岸はますます美しい楽土として想像されるようになったのである。

大乗仏典でも、この永遠の仏が住む楽土は、無数の美しい宝石や花で飾られ

た荘厳な世界として描かれている。例えば、『華厳経』（十地品）では、楽土、仏国土は、あらゆる種類の宝玉が散りばめられ、無限の光明に照らし出され、宝玉でできた無数の蓮華が大蓮華のまわりを囲み、美しい音楽が奏でられている素晴らしい世界として描かれている。『法華経』でも、この仏陀の国土は瑠璃からなり、金の糸で飾られ、宝樹で美しく飾られ、諸菩薩たちが楼閣の中で楽しい生活を営んでいる世界として思い描かれている。仏教の思い描く仏国土の荘厳は、宇宙生命の世界の宗教的表現なのである。

しかしながら、このような楽土に住む永遠の仏も、この地上に降りてこなければならない。そうでなければ、衆生は救われない。苦に満ちた穢土に住む衆生は、苦に満ちているからこそ、救われねばならない。そのためには、浄土に住む仏は自己自身を限定して、この穢土に現われてこなければならない。此岸と彼岸、穢土と浄土は全く正反対の相異なる世界であって、その隔たりは無限のように思われる。しかし、同時に、この二つの世界は直結しているのでなければならない。反対者は一致しなければならない。

現に、大乗仏教では、法身としての仏は報身や応身となって、衆生済度のために、衆生の前にその姿を現わすと考えられている。法身は、仏の悟りを成り立たせる永遠の真理を仏の身体とみたものであるから、それは目にも見えず、姿形ももたない。したがって、それは、煩悩に惑わされている衆生には見ることができない。それゆえに、仏の法身は、報身や応身となってその姿形を現わす。

報身とは、菩薩の位にあった時に立てた願と修行の報いとして現世に現われた仏のことである。浄土系仏教が奉ずる阿弥陀仏は、この報身に当たる。それに対して、現にこの娑婆世界に生身の肉体を備え、修行して悟りを開き、衆生済度のために働く仏が応身である。この点から言えば、三十五才で悟りを開き、説法し、八十才の生涯を終えた釈尊（仏陀）なども、仏の応身に当たる。逆に言えば、釈尊は、永遠の生命つまり法身が、衆生済度のために、仮に人間の姿をとってこの地上に現われた仏だということになる。『法華経』が、釈尊を、永遠無限の生命をもった仏（本仏）がこの地上に姿を現わした仏（迹仏）だとみているのは、仏の法身と応身の関係に当たると考えてよいであろう。仏の報身にしても、応身にしても、法身の顕現と考えられているとすれば、これらは、いずれも、宇宙の大なる生命がこの世界に働き出ているということの宗教的な

表現なのである。

密教では、宇宙の大なる生命を大日如来によって象徴し、しかも、この大日如来が現実世界の一切のものの中に存在すると考える。そのため、密教では、如来から悪鬼・畜生に至るまで、すべてを大日如来の身体と考え、これを四種に分けて考える。自性身、受用身、変化身、等流身である。そのうち、自性法身は、永遠の生命そのもの、絶対的真理そのもの、大宇宙そのものを表わす。受用法身は、自らの楽しみのため、あるいは衆生を救済するために、現実世界に現われた仏を言い、普賢、弥勒、観音、文殊、各菩薩がこれに当たる。変化法身は、特別に宗教的な素質をもたないものに対しても分かるような姿となって現われる仏身で、釈尊（仏陀）をはじめ、宗教的な偉人などがこれに当たる。等流法身は、相手と同じ姿となって法を説く仏身で、仏教以外の神々とか、畜生とか、悪鬼までも含む。この四種の法身は、宇宙に存在する無数の仏の身体を四種にまとめたものであるが、これらは、どれも、唯一の真理たる大日如来と同一である。唯一無限定の大日如来は、自己自身を限定して、宇宙の一切の存在者となって現われる。一身は多仏であり、多仏は一身である。一は多であり、多は一である。

密教の自性法身は宇宙の大なる生命を表わし、それ以下の諸法身は、この宇宙の大なる生命の顕現を意味している。宇宙の大なる生命は自己自身を限定して、現実世界に直接働き出てこなければならない。諸仏は、衆生済度のために、衆生の前に現前してこなければならない。宇宙の大なる生命は、われわれの世界から遠く離れたところに働いているのではない。それは、われわれの世界のただ中に働き出て、常にわれわれを支えている。そのことを、仏教の仏身論は象徴的に語っている。

### 宇宙生命の遍在

大乗仏典でも、如来や諸仏の衆生世界への現前が豊かな想像力によって盛んに説かれている。例えば、『華厳経』（如来性起品）でも、宇宙生命の象徴である毘盧遮那仏の知慧の光明が衆生世界のすべてのものに広く及び、衆生を済度すると、繰り返し説かれている。如来の知慧の光明はすべての世界を隈なく照らし出し、太陽の光のように、あるいは月の光のように別け隔てなく、はかりしれない仕方で、諸菩薩や一切衆生、さらに餓鬼・畜生にまで注ぎかけ、すべてを悟りに至らせる。しかも、如来の知慧の大光明は一味であるが、それを受け取る衆生の性質が種々異なるために、それは種々様々な光明となって出現する。また、この一切衆生を利益する如来の働きは、法雲が降りて来て、一切衆

生に法の雨を平等に降らせるという比喩によっても表現されている。そのようにして、無量無限の如来の働きが、一切の衆生、一切の世界にあまねく遍在していることを説くのである。

同様に、『華厳経』（十地品）でも、菩薩が最後の悟りの境地、法雲地に入り、禅定に入ると、無数の蓮華や無数の菩薩が出現し、光明が全世界に放たれ、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間の世界の一切の苦悩が消えて、声聞（しょうもん）・縁覚（えんがく）の世界も照らし出され、すべての光明が大輪となって大虚空に浮かんでくる様子が描かれている。また、『華厳経』（入法界品（にゅうほっかいぼん））でも、普賢菩薩が、すべての毛孔から一切世界の微塵の数に等しい光明の雲を放ち、一切世界を照らし出して、衆生たちの苦しみを救い、さらに、普賢菩薩の毛孔の一つ一つに三世一切の諸仏諸菩薩が出現している様子が描かれている。『華厳経』（世主妙厳品（せしゅみょうごんぼん））で言われているように、「仏身は周遍（しゅうへん）して法界に等しく、普（あまね）く衆生に応じて悉（ことごと）く現前す」ということが、華厳経の繰り返し語ろうとしてきたことである。仏性はこの世界のすみずみに現われ出ていなければならないのである。

『法華経』（薬草喩品）でも、大きな雲が世界を覆って、平等に雨を降らせ、草木を潤し、その力量に応じて育てるのと同じように、如来の説法は、同一の味をもって一切衆生に及ぼされ、一切衆生をして、それぞれの機根に応じて悟りを開かせると言われている。仏法の功徳は、すべての衆生に等しく降り注ぎ、あらゆる衆生の足下に遍満しているのである。

真言密教でも、同じようなことが言われている。大日如来の知慧の光明はあらゆるところに満ちて、影をつくることもなく、昼と夜の区別もない。また、それは、あらゆる生きとし生けるものの本来もっている特性を発揮させ、その仕事を完成させる。また、太陽が雲のあるなしにかかわらず存在するように、大日如来の光明は、生じたり滅したりすることなく、世界を照らし続けて永遠であるという。ここでも、大日如来の普遍的で永遠不滅の働きは、絶対の世界から現実世界の一切のものに働きかけ、一切衆生を救済すると考えられている。

大乗仏教では、どこでも、仏の永遠の力と法は、この世界に遍在しているものと考えられている。だからこそ、だれもが解脱に至ることができるのである。宇宙の根源の命は、宇宙全体にみなぎりわたり、過去・現在・未来を貫いて永続している。とすれば、われわれは、最初から、宇宙に遍在する根源的命、永遠の仏法の中にいるのだと言わねばならない。宇宙の中の一微塵のようなわれわれの個体の中にも、常に宇宙の全生命が働き出ており、われわれを支えてい

るのである。

### 悉有仏性

宇宙生命が世界のすみずみに働き出ているとすれば、世界に存在するすべてのものに、宇宙生命の働きは宿っていることになる。このことを、大乗仏教は、昔から「一切衆生悉有仏性」と言ってきた。

『涅槃経』（高貴徳王菩薩品・師子吼菩薩品）の説くところによれば、仏性は常に存在していて変化なく、すべての衆生は、仏性つまり悟りを得ることができる本性をもっているという。一切の衆生は、ことごとく仏性を有しているのである。

『華厳経』（如来性起品）でも、如来の光明が全宇宙のすみずみにまで降り注ぎ、この如来の光明に、万物は照らし出されていると説かれていた。華厳教学は、この『華厳経』の説く如来の性起を独自に解釈し、如来即性起と理解した。つまり、如来とはもともと真理が現われ出てくることを意味し、それは、一切衆生の中に仏性が起きてくることに他ならないと考えたのである。かくて、万物は仏性の現起に他ならず、すべてのものはもともと仏性をもっていることになる。われわれが仏性に目覚めるのは、われわれに本来仏性が備わっていて、われわれを貫いているからである。「一切衆生悉有仏性」を「性起」の方から理解したのである。

真言密教でも、この考えに変わりはない。一切衆生にもともと備わっている仏性を覆っている無知や煩悩を取り払うなら、本来備わっている清浄な仏性が芽を出して、だれもが仏になれるとする。空海も、このような考えを『大日経』に基づいて確立した。そして、自らの心を磨き、他を利することに精進するなら、即身成仏することができると主張したのである。

最澄も、天台の根本思想「本来本仏性、天然自性身」つまり「人には本来仏となる本質があるから、おのずからにして成仏する」という思想に基づき、「凡聖不二」「生仏一如」をひたすら追求したのである。この凡夫や衆生に仏性が宿るという日本天台宗の考えは、その後、人間ばかりでなく、草木にも及ぼされ、草木成仏論が唱えられるに至る。

道元は、この草木成仏論をさらに拡大して、草木ばかりでなく、無生物にま

で及ぼす。『正法眼蔵』（仏性）の中で、道元は、「一切衆生は悉く仏性を有す」という『涅槃経』の言葉を、大胆にも「一切衆生、悉有は仏性なり」と読み替え、解釈し直す。そして、「悉有は仏性なり、悉有の一悉を衆生といふ。……衆生の内外すなはち仏性の悉有なり」「仏性かならず悉有なり、悉有は仏性なるがゆへに」と言う。また、逆に、「一切の仏性は衆生を有す」とも言う。

生物も無生物も含めて、万物は仏性そのものであって、その万物の一つのあり方が衆生、すなわち生きとし生けるものである。生きとし生けるものの内も外も、そのまま仏性のすべてである。仏性はすなわち万物であり、万物は仏性である。むしろ、仏性そのものが生きとし生けるものを有すのである。ここでは、生あるものも生なきものも、ともに仏性の中に収め取られている。万物が仏性という属性をもつのではなく、むしろ、万物が仏性そのものであり、仏性の中に万物が属すのである。全宇宙に仏性ならざるものはない。このことを表わすために、道元は、<悉有>を名詞化して読むとともに、悉有と仏性とを直結して解釈したのである。そして、仏性とは牆壁瓦礫、つまり<かきね>や<かべ>や<かわら>や<いしころ>だと言う。

宇宙の根源的生命がはじめから働き出ており、万物はこの宇宙の根源的生命をそれぞれ表現しているのだとすれば、万物は同時に成道しているのだとも言える。万物は、仏性の場で、ともに悟りを開いている。道元も、『正法眼蔵』（大悟）で、雪山も木石も、諸仏の悟りの場で、それぞれに同時に悟りを開き、それぞれのあるがままの姿を現わし出しており、そこに前後の別はないと言う。宇宙生命が自らを現わし出す時、その場で、万物は自らを現わし出す。宇宙生命の場で、森羅万象は同時に生起する。

このことは、また、万物が仏の光明の中で互いに輝いているという印象によっても語られる。『正法眼蔵』（光明）でも、長沙景岑や雲門文偃の言葉をあげ、十法世界のことごとくが仏祖の眼であり、仏祖の言葉であり、仏祖の全身であり、仏祖の光明ならざるはないと言う。この光明が修行して仏となり、仏として座し、仏を証するのである。人それぞれみな光明をもっており、僧堂・仏殿・

庫裡・山門すべてが光明である。人々が光明を有するとともに、光明が人々を有している。生まれ来たり死して去るも光明の去来であり、修行するのも、草木も、山水も、鳥も、すべてが光明である。この宇宙のすべてのものが仏祖の光明であり、それ自身が光明なのである。

かくて、道元は、『正法眼蔵』（一顆明珠）で、玄沙師備の言葉をあげ、「尽十法世界、これ一顆の明珠なり」と言う。この全宇宙が一粒の光り輝く珠だと言うのである。この宇宙全体が正法の眼であり、一つの真実体であり、光明であり、さわりなく、まろやかにして円転自在である。そして、

「愛せざらむや、明珠かくのごとくの彩光きはまりなきなり。彩々光々の片々条々は、尽十法界の功徳なり」

と言う。この世界の万物がそれぞれに光り輝いているとともに、世界全体も光り輝いている。無数の草の露が朝日を受けて輝くように、草木虫魚、山川草木、日月星辰すべてのものが、宇宙生命の輝きを輝く。さらに、それらすべてを含む宇宙全体も、一個の輝く生命体なのである。解脱の前に開かれてくる世界は、そのような万物光輝の世界である。

このことを別の言葉で言えば、『法華経』（方便品）の言う「諸法実相」ということになるであろう。すべてのものはそのままでありのままのあり方をしており、一切の存在は真実相、妙法の現われだと、『法華経』は説く。ものが如法にあることが、諸法実相ということである。春に花が咲き、秋に木の葉が散る。この自然の営みすべてが、如法の現われであり、真実相である。この宇宙のありとあらゆるもの、森羅万象が、宇宙の大生命の表現であって、それらは、そのまま、ありのままに真実を現わし出している。

### 宇宙生命の表現としての自然

わが国には、昔から、「草木国土悉皆成仏」という考えがあった。それは、自然物のあらゆるものに生命力を認める仏教渡来以前の日本人の自然観に源泉をもっている。そして、やがて仏教が受け入れられ、日本人の魂に深く根づくと、この考えは、山川草木すべてのものが仏性を有し、仏としての本性を表わし出

しているという考えに結実した。それは、特に天台や真言の平安仏教で明確に称えられるとともに、鎌倉新仏教にも引き継がれ、さらに、平安末期以後の歌道や室町のころ完成された茶道、華道、能、江戸の俳諧にまで延々と引き継がれてきた考えであった。

道元も、『正法眼蔵』（仏性）で、「山河大地、みな仏性海なり」「山河をみるは仏性をみるなり」と言う。山も川も大地も、自然はみな仏性の現われであり、仏性の海に建立されたきらびやかな館である。山が山であり、川が川であり、大地が大地であるのは、仏性が仏性として働き出ていることに他ならない。山や川を見ることは、そのまま仏性を見ることである。あらゆるものに仏性は現われ出ている。

また、『正法眼蔵』（山水経）では、

「而今の山水は、古仏の道現成なり。ともに法位に住して、究尽の功徳を成ぜり。空劫已前の消息なるがゆえに、而今の活計なり。朕兆未萌の自己なるがゆえに、現成の透脱なり」

と言う。今ここにある山水は、古仏の道が現に現われ出てきたものである。山も水もそれぞれのあり方に徹して、無限の功徳を成就している。それは、時間の始まる以前のことがらであるがゆえに、永遠の今のことがらである。それは、ものの兆しの現われる以前の自己であるがゆえに、自己であることを解脱している。自然は仏の姿であり、仏法の真理の実現である。それは、過去・現在・未来を越えた絶対現在の自己表現である。自然は、宇宙の真生命の表現なのである。

同じようなことは、また無情説法という形でも説かれる。感情や意識をもたない山川草木が、そのままの姿で法を説いている。松を吹く風の音も、渓谷を流れる水の音も、みな諸仏の説法ならざるはない。しかも、『正法眼蔵』（無情説法）によれば、その説法は、<法を説く>のではなく、<法が説く>のだと言う。「説法は法説なり」と言う。万法が山水を通して自らを説示し現わし出すことが、説法に他ならない。『正法眼蔵』（弁道話）でも、草木や土地は、いずれも大いなる光明を放ち、深くして妙なる法を説いて極まるところがなく、草木や牆壁がよく生きとし生けるもののために法を説けば、生きとし生けるものも、翻って、草木や牆壁のために法を述べると言う。

また、「十方法界の土地・草木・牆壁・瓦礫みな仏事をなす」（弁道話）とも、「およそ経巻に従学するとき、まことに経巻出来す。その経巻といふは、尽十法界、山河大地、草木自他なり」（自証三昧）とも言う。大自然の中のあらゆるものが仏事をなし、経巻を読み、宇宙の真生命を現わし出している。そこでは、自然と人とが一つになって、自然の説く法の中で人が悟り、人の悟りの中で自然も悟る。そのような無礙の境地が、そこには語られている。自然は宇宙の真生命の表現であり、その表現の中で、人もまた自らの真生命に目覚めるのである。

しかし、自然がそのまま仏性の現われであり、仏法の顕現であるという考えは、平安仏教を開いた最澄や空海がすでに語っていたことである。

最澄は、奈良の南都で授戒して後、すぐに都の喧騒を離れ、故郷の比叡の山に籠もった。そして、比叡の山の土地神を祀り、清浄・霊験な山中で、ひたすら仏道を修行し、『法華経』の諸法実相の真実を体得しようとした。自然万物、山川草木が語る仏法の声の中で、真の道を得ようとしたのである。最澄の『願文』には、そのような並々ならぬ志が語られている。

空海も、若き日に吉野や四国の山々に籠もり、高野山を開いて後も、その深山幽谷の地で、万物救済の修行を徹底し、常に、自然とともに仏法を行ずることを理想としていた。空海の『性霊集』（巻第一）の「山に遊んで仙を慕う詩」の一節でも、次のように記されている。

……

山毫　溟墨を点じ

乾坤は経籍の箱なり

万象　一点に含み

六塵　縑緗に閲す

……

日月　空水を光らし

風塵　妨ぐる所無し
是非　同じく説法なり
人我　俱に消亡す

……

山は筆となって、大海原の墨池に墨をつける。天地は経典の入れ物。あらゆる現象は一つの点の中に含まれ、欲望を生み出す六つの対象は、書物にすべて記されている。日と月は空間と水を照らし、風や塵も邪魔はできない。正も邪も等しく如来の説法であり、自他の区別は消え去ってしまう。

ここでも、自然万物は仏法を語る経典であり、仏の説法であると説かれている。この詩では、大宇宙と渾然一体となった境地が詠われている。宇宙は光明に満ち、万物がそれを表現していると詠われている。空海の目から見れば、宇宙のすべてのものが大日如来つまり宇宙生命の姿であり、教えだったのである。

「一切衆生悉有仏性」にしても、「万物同時成道」にしても、「諸法実相」にしても、「草木国土悉皆成仏」にしても、「無情説法」にしても、どれも同じ一つのこと、つまり、万物は宇宙の大なる生命の表現に他ならないということを語っている。この宇宙に存在するすべてのものが、それぞれに大なる宇宙の表現点として、それぞれに光り輝いている世界、それが解脱や悟りの世界に開かれてくる世界なのである。

### 曼荼羅の世界

このことを最もよく象徴的・視覚的に表現しているのは、密教の曼荼羅である。真言密教の曼荼羅には、大曼荼羅、三昧耶曼荼羅、法曼荼羅、羯磨曼荼羅のいわゆる四曼がある。そのうち、よく知られた大曼荼羅は宇宙の全体相を具象的に表現したもので、種々様々な形で表現された無数の仏像の大集成からなる。そこでは、それぞれに違った相をした諸仏・諸菩薩が、一定の規則のもとに体系的に描き出されている。この曼荼羅に描かれる無数の諸仏・諸菩薩こそ、大宇宙をそれぞれの仕方で映し表現している宇宙の諸部分を象徴している。

この大曼荼羅は、通常、金剛界曼荼羅と胎蔵界曼荼羅の金胎両部の曼荼羅として描かれている。このうち、金剛界曼荼羅は、如来の金剛不壊の本体の働きとしての知慧の世界を展開する。それは、無限に区別される経験世界を表わし、

如来の智法身と言われる。それは、大日如来と、その四周に位置する阿閦・宝生・阿弥陀・不空成就の四如来を中心に、全体で三十七尊でもって構成される。大日如来を除いた三十六尊は、四つのグループに分けられ、規則正しく組織され、いずれも密教教理によって意味づけがなされている。

他方、胎蔵界曼荼羅の方は、正式には、大悲胎蔵生曼荼羅と言われ母親が胎児を慈しみ育むように、如来が慈悲の心で衆生を救済する精神を視覚化したものである。これは、如来の理の法身と呼ばれる。中心部の中台八葉院の中央には、大日如来、その周囲に宝幢、開敷華王、無量寿、天鼓雷音の四如来と、その因位にある普賢・文殊・観音・弥勒の四菩薩、さらに、その回りに諸仏、諸明王、諸天が配置され、これらが仏部、蓮華部、金剛部に分けられている。胎蔵界曼荼羅に配置される諸尊は無数で、その周辺部には、ヒンドゥーの神々や餓鬼、悪鬼、お化けのようなものまで配置されている。何もかもを大日如来の分身とみて、宇宙の中の一切を救い取ろうという精神を表わしているのである。

一方、大曼荼羅に並ぶ三昧耶、法、羯磨の三曼は、宇宙の活動の特殊相を表わすものである。そのうち、三昧耶曼荼羅は、諸仏・諸菩薩が所持する刀剣、輪宝、蓮華など、仏具によって描くもので、それらによって仏の働きを象徴する。それは、具体的には、山川草木、鳥獣虫魚の姿を指す。それらは、みな、仏の働きとみられているからである。また、法曼荼羅は、本尊を示す梵字、真言、経典などによって描かれる。それらは、声や字によって表わされ、いずれも真実の法の表現だとみられる。また、羯磨曼荼羅とは、諸仏・諸菩薩の働きを指し、大自然の営みや人々の行ないなど、宇宙の活動すべてのものを曼荼羅とみるものである。

どの種類の曼荼羅も、密教の曼荼羅は宇宙の縮図である。宇宙に存在するすべてのもの、日月星辰、山川草木、鳥獣虫魚、餓鬼、畜生、人間、諸天、明王、菩薩、仏、あらゆるものは、大日如来つまり宇宙の大生命の分身である。宇宙

に存在するすべてのものは、宇宙生命の表現であり、それぞれに命を分けもっている。しかも、それらは、宇宙生命の場で互いに連関している。万物がそれぞれに宇宙の真理を表現し、それぞれが価値をもち、それぞれが個性を発揮しているとともに、それぞれが互いに結びついている。一は多であり、多は一である。このような世界観を、密教の曼荼羅は語っている。曼荼羅は壮大な宇宙観の表現であり、一切のものを宇宙生命の表現として包容する壮大なコスモロジーなのである。

このような曼荼羅的世界観によれば、渓谷の響き、松を吹く風の音、鳥の声、虫の声、読経の声、真言、経典など、およそ目前に表現されるものは、すべて宇宙の大なる生命の現われだということになる。真理は目に見えない遠く離れた世界にあるのではなく、この現実にあまねく表現され、その中に宿っている。本体は現象の中に現われ、真理は現実の中にある。

空海も、『声字実相義』の中で、

五大にみな響有り

十界に言語を具す

六塵悉く文字なり

法身は是れ実相なり

と言っている。宇宙万物が語りかけている言葉こそ、宇宙が開示している真理そのものに他ならないと言うのである。

五大つまり地・水・火・風・空にはみな響きがあり、それぞれに真理を表現している。しかも、この響きは声となって表わされ、その声はいつも何らかの意味を表わし出し、聞く人の心に響く。この声が表わす意味を名と言い、この名が形あるもので示されると字となる。声が名を表わすのは必ず文字により、文字の起こりは六塵にある。六塵、つまり色・声・香・味・触・法の六種の対象は、すべて文字である。如来の説法は文字により、その文字は六塵から起きている。六塵は、大日如来つまり宇宙の真理の顕現に他ならない。五大とか、六塵とか、現象しているあらゆるものはすべて言葉である。地獄・餓鬼・畜生・

修羅・人間・天上・声聞・縁覚・菩薩・仏の十界、すべての世界は表現世界である。世界は如来の説法であり、如来の表現である。世界のあらゆる言葉は法身の現われであり、表現は真理の現われである。声字より他に実相はなく、声字そのものが実相である。表現されるものが即真理である。この宇宙そのものが真理の世界であり、真理の自己表現である。真理は常に言葉を放っている。この宇宙は如来の言葉であり、表現である。この世界の万物は如来の真言であり、実相である。

空海にとって、宇宙は、常にわれわれに語りかけ働きかけるものである。春、花が咲き、秋、木の葉が散るのも宇宙の語りかけであり、働きかけである。渓谷の惜しむことのない響きも、宇宙生命の響きである。それは如来の説法であり、実相である。

真言密教が宇宙の真理を梵字によって表現するのも、実相は常に声字となって現われているという考えに基づいている。例えば、よく知られていることだが、梵語の阿字は否定を意味するがゆえに、それは不生不滅の永遠の真理を象徴する。この世の存在は生老病死の生成流転の中にあり無常であるが、宇宙の永遠の真理は本来生起することも生成することもないということを、阿字は象徴する。したがって、これは、また、一切の存在は空であるということも表現している。

しかし、梵語の阿字は否定を意味するばかりではない。すべての父音は、常に阿字を伴ってのみ表記される。阿字は、すべての父音の中にあって当の父音を形成するという意味で、肯定の意味をもつ。さらに、あらゆる子音は、この阿字の変化である母音が結合することによって形成される。そのために、阿字は、また、万物の中に遍在し、万物の生成流転をあらしめている宇宙の根源的真理を象徴する。

阿字は、その否定的機能によって、不生不滅の真理や一切皆空の真理を表現するとともに、同時に、肯定の機能によって、万有に遍在する永遠の真理を表わす。阿字は、否定即肯定の根源的真理の象徴である。これを人格的に表現すれば、大日如来となり、その機能を図示すれば、金胎両部の曼荼羅となる。阿字ばかりでなく、すべての文字はそれぞれに宇宙の真理を表現し、宇宙の実相を象徴すると、密教は考える。宇宙の真理は現象しなければならないのである。

空海の密教は現象をそのまま真理と考えるから、地・水・火・風・空・識の六大を、そのまま仏身と考える。現実に存在する生あるものも、生なきものも、宇宙の大生命たる仏も、どれも物心一体の六大よりなる。そして、この六大を、

如来の象徴、宇宙生命の表現とみるのである。空海が、『即身成仏義』の中で、「仏、六大を説いて、法界体性となしたまふ」と言っているのはその意味である。空海においては、法界とは、目に見えない世界ではなく、目に見える宇宙そのものである。六大そのものが、それぞれに全体の宇宙を表現し、象徴しているのである。地・水・火・風・空・識は宇宙に遍在する無数の仏であり、大日如来の身体である。六大は、宇宙の真理の表現であり、宇宙の真生命の宿る場である。空海においては、六大こそ如来の法身である。われわれの世界の中に仏は宿り、宇宙そのものが仏の身体である。真理は具体的でなければならない。法身は、宇宙万物そのものとして、永遠の法を説き続けている。法身は一切であり、一切は法身である。

空海にとっては、現実世界がそのまま理想世界であり、われわれの現実の生は肯定される。空海の現象即実在の哲学は、根源的生命とその無限の表現の中に多様な価値をそのままに認めながら統合する生命哲学であり、生命の絶対肯定の哲学である。しかも、それを思想的に表現するばかりでなく、象徴的儀礼の体系としても表現し、その中に身体を通した実践を組み込み、壮大な宗教世界をつくりあげたのが空海の密教だったのである。

### 大宇宙と小宇宙

万物が宇宙生命の表現だとすれば、万物はそれぞれ大宇宙を映す小宇宙である。空海は、若いころ諸国の山に籠もって、虚空蔵求聞持の法を修行した。それは、自己と宇宙が一つであることを体得する修行法であった。この修行法によって、自己が大宇宙の中に生かされており、自己の中に大宇宙が宿っていることを悟ったのである。この修行を通して、自己が宇宙の神秘に包まれ、宇宙と冥合する時、即身成仏が体得される。空海は、この修行で得た体験を、「谷響きを惜しまず。明星来影す」という言葉で語っている。それは、自然万物が宇宙の大いなる生命を表わし出し、自己自身も大宇宙を映す小宇宙として、それと一つになりえたことを表現するものであった。万物が大日如来の身体であり、永遠の法身の体現であるとする空海の密教思想は、この若い時の修行にその源泉をもつ。

最澄の開いた天台宗も、一粒の砂の中にも、一毛の先にも全宇宙が現在していると考えるものであった。よく知られた一念三千の教えは、それを表わしている。瞬間の思念つまり一念の中にも、三千世界つまり全宇宙が含まれている。ここでも、瞬間瞬間の自己は、そのままで大宇宙を映している小宇宙と考えられている。

道元も、『正法眼蔵』（梅華）で、先師如浄の提唱や偈をあげて、同じようなことを語っている。

「老梅樹の忽開華のとき、華開世界起なり。華開世界起の時節、すなはち春到なり。」

老梅樹がたちまち華を開く時、それは、華開いて世界起こるということに他ならない。華開いて世界起こる時節は、とりもなおさず春の到来に他ならない。春が到来して華が開くのではなく、華が開いて春が到来するのである。むしろ、華の中に春が咲くのである。梅は早春を開く。雪中に咲く梅華こそ如来の眼晴である。梅華の開く時、諸仏は世に出現する。一輪の梅華という小宇宙の中に、大宇宙は開くのである。

『正法眼蔵』（唯仏与仏）でも、「古仏いはく」として、

「尽大地是真実人体なり、尽大地是解脱門也、尽大地是毘盧の一隻眼なり、尽大地是自己の法身なり」

と言っている。この大地のことごとくが、とりもなおさず真のわが身である。この大地のことごとくが、とりもなおさず解脱門である。この大地のことごとくが、とりもなおさず毘盧遮那仏の一眼である。この大地のことごとくが、とりもなおさず自己の法身に他ならない。自己の本当の身体は、実は大地そのものである。宇宙の塵のごとき人体も、実は地・水・火・風からなる宇宙と連続しており、宇宙と一つである。自己と大地自然には隔てがなく、自己と大地自然は一つである。しかも、この大地自然がそのままで宇宙生命の表現であり、自己の真理に他ならない。自己は、この限りない大地自然に開かれていることによって、悟りを得ることができる。小宇宙としての自己は大宇宙と一つなのである。

これと同じことは、『正法眼蔵』（十方）でも、「尽十方界是沙門の一隻眼」「尽十方界是沙門の全身」「尽十方界一人として自己ならざるなし」とも言われている。尽十方界、つまりこの大宇宙が修行者の身体である。修行者の身体は大宇宙とつながっている。自己の身体は、各部分がそれぞれに天に接し地に接する。天地と自己に境界はない。全宇宙が私の身体であって、私の身体でないものはない。自己が宇宙になり、宇宙が自己になる。自己という小宇宙は大宇宙に連

続しているのである。

だが、大宇宙の中に小宇宙があり、小宇宙の中に大宇宙があり、大宇宙と小宇宙は一つであるという思想は、よく知られているように、すでに古代インドのウパニシャッドの哲学にあったものである。ウパニシャッドの哲学は、個我の原理である我の霊をアートマンと呼び、全宇宙の本質である宇宙の霊をブラフマンと呼び、このアートマンとブラフマンは一つであり、両者が融合するとき究極の解脱が得られるとする。この我と宇宙は一つであるという思想は、その後大乗仏教にも深く影響し、わが国の真言密教にも、天台にも、禅や念仏にも、延々と流れ来たり引き継がれてきた思想であった。万物は大宇宙を映す小宇宙であり、宇宙生命の表現なのである。

解脱や悟りの場で開かれてくる宗教的世界は、宇宙生命の無限の表現世界に他ならない。

### ありのままの世界

万物が宇宙生命の表現であり、宇宙の働きと別のものではないということに気づく時、万物がそのままで如法にあるあり方が明らさまになる。万物がそのままにあることが、法の世界にあることである。法つまり真理は、目前の存在するものの背後に隠れてあるのではなく、存在するものがあるがままにあること、そのことが真理であり、法なのである。その点では、仏教の法（dharma）という概念が真理を意味すると同時に、存在するものをも意味するのには、深い意味があると言わねばならない。真理は、あるもののあるがままのあり方として、現前している。万物が法を説いていると言われるのも、万物の如法性を表現している。あらゆる存在者のあるがままの如性が真理である。

空海が、万物をそのまま法身と見て、すべての存在をあるがままに認め、すべてを肯定したのも、万物の如法性を見たからである。『性霊集』（巻第一）の詩「山に遊びて仙を慕ふ」の中で、

法身のみ独り能く詳らかなり
鳧鶴　誰か理に非ざる
蟻亀　詎ぞ暐はれざらん

と言っているのも、存在するものの如法性を語っていると言える。脛の短い鴨も、脛の長い鶴も、どれも道理に適っていないことはない。小さい蟻も、大きな亀も、日の当たらないことはない。如来のみは、そのことをよくわきまえておら

れる。あらゆるものは、それぞれに個性をもってこの世界に存在しているが、それぞれが、そのままで真理の現われであり、法の顕現なのである。

なるほど、大乗仏教、特に般若系思想では、一切皆空を説き、空こそ真理だと言う。すべての存在は縁によって起き、相依相対であって、それ自身としての自性はないとして、一切の存在の実体性を否定する。しかし、般若系思想は、単にすべてのものの空しさを説いているのではない。むしろ、般若系思想の究極の真理は、この空をも空ずるところにある。空をも空ずるとき、すべてのものは、そのあるがままの姿で現前してくる。空の場は、むしろ、我も物も、その真実のあり方をあらわにしている場である。色即是空は空即是色に転じなければならない。一切皆空は真空妙有に転じなければならない。絶対否定は絶対肯定に転じなければならない。空は有と対立するものではなく、有と一つでなければならない。

天台教学が、空仮中の三諦円融を説いたのも、この究極の真理を見ていたからである。目前に存在するものの縁起つまり相依相対性が自覚されるとき、存在するものは仮となり、真理は空として現前する。だが、この空は、空をも空じて、再び存在するものの如実性をあらわにするのでなければならない。仮が否定されて空となり、空が否定されて仮となり、仮と空の間、中のところに究極の真理は現われている。存在するものがあるがままにあり、そのままで真理をあらわにしているあり方が真理である。

道元も、『正法眼蔵』（空華）において、空の世界は本来無華であるが、しかし、それは、同時に、今の瞬間において華開くのでなければならないと言う。それは、桃や李、梅や柳の花が咲くのを見れば明らかである。華は本来無華であるが、時節が来れば、そのものの本性を全面的に現わし出し、華開くのである。空は必ず開花する。空は単なる空ではなく、空をも空じて、あるがままの有となるのである。宇宙の真理は、単に真理として彼岸にあるのではなく、この世界の万物の有となって如実に現われ出ているのである。　道元が、『正法眼蔵』（坐禅箴）の中で、宏智禅師の詩句を翻案して、

水清くして地に徹す　魚行いて魚に似たり

空闊くして天に透る　鳥飛んで鳥のごとし

という透徹した詩句で表現していることも、万物の如法性に他ならない。澄みきった水や広い空、つまり空の場においてのみ、魚は魚であり、鳥は鳥であり、それぞれがその本分を如実に現わし出している。空の場で万物は如法にあり、あるがままにある。宇宙の真理は、まさに現象するのでなければならない。

万物が如法にあるとき、すべてのものはそれ自身の自性（じしょう）を現わし出している。すべてのものが、それぞれに、その独自性を発揮している。ものがもの自身になっている。あらゆるものが、自己自身において、自己自身と同一である。魚は魚であり、鳥は鳥である。しかも、このとき、魚は、自己が魚であることを知らない。鳥は、自己が鳥であることを知らない。知らないことによって、魚は魚に徹し、鳥は鳥に徹している。魚も鳥も、真理の場で、自己の真生命を現わし、そのことによって、宇宙の真生命を表現している。そこでは、自己と他者の対立も、自己と自己の対立もなく、宇宙的我において、自己は自己である。自受用三昧（じじゅようざんまい）の境地は、そのような境地を言う。

『正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）』（現成公案（げんじょうこうあん））でも、

「たき木（たきぎ）ははひとなる、さらにかへりてたき木となるべきにあらず。しかあるを、灰はのち、薪（けんしゅ）はさきと見取すべからず。しるべし、薪は薪の法位に住して、さきありのちあり。前後ありといへども、前後際断せり。灰は灰の法位にありて、のちありさきあり」

と言っている。薪は燃えて灰となり、それが再び薪に戻ることはない。しかし、それを、灰は後に続き、薪は始めにあると考えてはならない。薪は薪になりきっていて、始めから終わりまで薪である。前後があると言っても、その前後は断ち切られている。灰もまた灰になりきっていて、始めから終わりまで灰である。つまり、薪も灰もそれぞれに自己の三昧に徹していて、己の自性を現わし出し、自己同一性に住している。そのかぎり、薪が灰になり、薪が前、灰が後と分別すべきではないと言うのである。

さらに、道元は、同じ箇所で、人間の生と死もこれと同じだとみて、「生も一時のくらいなり。死も一時のくらいなり」と言う。生は一瞬一瞬において生になりきっており、死は死で、一瞬一瞬において死になりきっている。生にあれば生に徹し、死にあれば死に徹し、生にあっても、死にあっても、自己同一性つまり自受用三昧にあることが、仏法の教えだと言うのである。

寒蝉（ひぐらし）は、短い夏を夏とも知ることなく、命を限り鳴き続け、そして死ぬ。寒

蝉も、生に徹し、死に徹しているのである。それでこそ、寒蝉は寒蝉なのである。それは、ただ、宇宙そのものの大三昧に身を任せ、その中に住す時にのみ、可能である。いかに生死に迷い煩悩に惑わされていても、我も人も、すべてのものは、それ自体としては、常にそのような宇宙的三昧のうちにあるのだと言わねばならない。

道元は、また、同じことを『正法眼蔵』（全機）の中で、圜悟禅師の「生也全機現、死也全機現」という言葉を掲げ、これについて縷々説いている。大地も、虚空も、すべて、生ける時にもあり、死せる時にもある。そして、大地も、虚空も、生がその全機能を顕現することを碍げるものはどこにもなく、また、死がその機能のすべてを現ずるのを碍げるものも全くないと言う。生も死も、宇宙の無尽蔵な働きの中で、その機能を全うしているのである。草も木も、虫も獣も、この世に存在しているものは、それぞれに全力を挙げて生き、死ぬ。そのような時々刻々に躍動する全力的存在、生命の生々たる働きを、道元は見ていたのである。

華厳教学を完成した法蔵が、<挙体全真>つまり、全存在を挙げてそれが真理そのものであると言ったのも、大宇宙の働きの中での万物の全力的な生の躍動を見ていたからであろう。

『法華経』（方便品）の説く<諸法実相>の考えも、同じことを語っている。諸法実相とは、すべての存在がありのままにあるあり方が、そのまま真理であるということであった。諸法の実相ではなく、諸法が実相である。存在するものの真理は、存在するものの背後に隠れて別のところにあるのではなく、存在するものの如実にある姿そのものである。『法華経』の説く十如是、如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等は、この存在するもののありのままのあり方を表現している。すべて存在するものは、形相・本性・実体・能力・作用・原因・条件・結果・果報をもっているが、それらは互いに関係し合って、帰するところ、それぞれありのままにある。そのありのままのあり方以外に、真理の存するところはない。

道元も、『正法眼蔵』（諸法実相）で、この『法華経』の説く諸法実相と十如

是について、言葉を極めて語り尽くしている。その語るところは難解であるが、つまりは、実相の、諸法のと言うけれども、それもまた、二つのものがあって相逢うわけではなく、言うなれば、春は花に宿り、人は春に逢うということに尽きる。さらに、道元は、玄沙師備や天童如浄の故事や説をあげて、燕が鳴き、不如帰の声が聞こえる、そのことが、他ならず実相を談じ実相を語っていることだと述べている。また、『正法眼蔵』（法性）でも、『法華経』の如是性を説明して、花開き葉落ちることがとりもなおさず如是性ということであり、一切の存在のあるがままの姿を離れて法性なるものは考えられないと言う。

万物の如法性にしても、真空妙有にしても、自受用三昧にしても、諸法実相にしても、結局、同じ一つのことを語っている。万物のあるがままのあり方、それがそのまま真理の現われであり、宇宙の真生命の顕現であるということである。解脱や悟りの場に開かれてくる世界は、そのような万物のありのままの世界である。

### 真理と存在

西洋では、古代ギリシア以来、真なる存在は実体という概念に求められてきた。生成消滅する現象世界の背後に常住不変の存在を考え、これを実体とみてきた。この実体としての存在は、それ自体として存在し、それ自身のもとにあるものであり、すべての偶然的なものを成り立たせる本体とされてきた。イデアにしても、個物にしても、神にしても、それ自身として存在する実体であった。

だが、仏教では、一般に、そのような実体というものを考えない。むしろ、あらゆるものは相対的・相関的にのみあるから、それらは実体性をもたないと考える。般若系思想の無自性空の立場は、それを表明したものである。むしろ、無自性空を真理と考える。

しかしながら、無自性空は、一切の存在者を超えてそれとは別のところに存在するものではない。もしもそのように考えるなら、無自性空という概念に反することになる。そのような背後の実体を否定するのが、無自性空の立場だからである。むしろ、空は、相対的・相関的にのみある存在、縁起によってある存在と一つに働き出ていると考えねばならない。般若系思想で、色即是空とともに空即是色が説かれるのはそのためである。

華厳哲学は、この空即是色の立場に立つ。無自性空の真理を真如と言い、真

如は随縁すると考える。真如は、万法の中にそのまま働き出ていると考える。真理はそのまま存在の中に働き出ているというのが、真如随縁という考えである。水は風が吹けば波立つように、真如は随縁して万法として現われる。しかも、水と波とは別のものではなく同一であるように、真如と万法は別のものではなく一つである。一切の存在の中に真理を見るのである。存在を離れて真理があるのではない。一切の存在のありのままの姿が、そのまま真理なのである。日月星辰、山川草木、鳥獣虫魚、すべてのものがあるがままにある。その姿が、そのまま真如なのである。この宇宙のあらゆるものが真如の現われであり、真如の変転なのである。

『華厳経』は、このことを海印三昧と名づけた。真如そのものである毘盧遮那仏の悟りは、静かな大海原のように、世界万物の姿を刻印している。そして、真如そのものである毘盧遮那仏は、常に三昧に入っているというのである。宇宙の大生命と万物は別のものではなく、宇宙の大生命に映し出された姿が宇宙万物なのである。

華厳哲学を完成した法蔵は、『華厳経』の海印三昧を解釈して、これを、妄念が尽きて心が澄みわたり、万象の姿が等しく映し出されている境地とした。宇宙の大生命、仏そのものはもともと悟りの境地にあり、真如そのものであるから、そこではあらゆる妄想は尽き果てて、静かな大海の表面のように澄みわたり、ありとあらゆるものが映し出されている。仏の悟りの世界、宇宙そのものは、われわれの方からも、仏の方からも説くことができないが、仏の悟りの境地に映し出される万物は菩薩の世界であり、説くことができる。しかも、仏の世界と菩薩の世界、宇宙そのものと万物は、水と波のように二にして一である。水が揺らいで波が起きるように、仏そのもの、宇宙そのものの変化した姿が菩薩と万物の世界だとみるのである。

『華厳五教章』（巻中・三性同異義　第一）では、このことは、また、鏡のたとえでも説明される。ちょうど、明るい鏡が、汚れたものでも浄らかなものでも等しく映し出して、しかも、常に鏡の明るさを失わないように、真如は、汚れたものを現わし出したり、浄らかなものを現わし出したりするが、常にその本性の浄らかさを失わない。むしろ、鏡が明るさを失わないからこそ、汚れたものでも浄らかなものでも映し出すことができるように、真如も本性の浄らかさを失わないから、汚れたものも浄らかなものも現わし出すことができるのである。また、鏡が、汚れたもの・浄らかなものを映し出すことによって、その明るさを顕現するように、真如も、汚れたもの・浄らかなものを現わし出すこ

とによって、その本性の浄らかさを顕現する。しかも、鏡と万象が二にして一であるように、真如と万象も二にして一である。万物の働きがそのまま宇宙生命の働きであって、万物と宇宙生命は一つなのである。

真如は、法身と呼んでも、仏心と呼んでもよいが、万物の実相のことであり、宇宙の真生命そのもののことである。それは、現に働き出ており、実在する。汚れなき真如は、如実に現われ、限りない功徳を現わす。この世界に存在するものを離れて、それとは別に真如があるのではない。この世界に存在するものは、悟りの境地から見れば、みな真如である。日月星辰、山川草木、鳥獣虫魚、すべての動きが、宇宙の真生命の働きなのである。

空海も、『十住心論』（巻第九）で、真如は無常と異ならない常住であると言っている。真理は不生不滅であって、永遠に存在するものと考えられるが、だからといって、それは、生成消滅するこの世の存在と別のものではない。永遠に存在する真理は、そのまま、この世界の生成消滅する存在として現われ出ているのでなければならない。空海の説こうとすることは、永遠の世界は現に目前に現象しており、現象している存在そのものが、そのまま永遠の相を現わし出しているということである。

『即身成仏義』では、このことをまた、鏡にたとえている。如来の心の鏡にはすべてのものが映し出され、如来の心の鏡はすべてのものを照らしているのだから、この世の迷える人々も本質的には仏と異ならない。したがって、この身体のままで成仏できるのである。一般に、密教では、この世間は虚妄ではなく、現実の世界にこそ真理が宿っており、現実をおいて他に真理というものはありえないと考える。すべては、大日如来の法身つまり宇宙の真生命の現われなのである。

天台宗の空仮中三諦円融（くうげちゅうさんたいえんゆう）の説は、これらと同じ真理論を、よりダイナミックな弁証法論理（※）によって展開したものと言える。現実の存在は、縁起によって生じているにすぎず、本来は空である。しかし、同時に、この空は、現実存在と別のところに働いているものではなく、現実存在つまり仮として現象していなければならない。かくて、仮は空であり、空は仮であるとみるところに、中としての真理があると考えるのが、空仮中三諦円融の説であった。空諦（くうたい）には、一切の存在の絶対否定の働きがあり、仮諦（けたい）には、その空をも否定して、一切の存在を肯定する絶対肯定の働きがあり、中諦（ちゅうたい）には、この否定と肯定が相即してい

るという真理が表現されている。そして、この三諦円融説は、三諦は一諦であり、三諦は一諦の三つの相であると考える。そこには、否定の否定としての弁証法論理があり、否定と肯定、相対と絶対の対立を止揚する弁証法論理がある。しかも、そのような弁証法論理を通して、本質即現象、現象即本質という真理が展開されている。真理は現象しなければならない。現象は真理の現われなのである。

道元が語っていたことも、このことと同様のことであった。例えば、『正法眼蔵』（都機）では、『金光明経』（天王品）に見える「仏の真法身は、なお虚空の如く、ものに応じて形を現ずること、水中の月の如し」という句をあげ、このことについて論じている。道元の解釈によれば、目の前に見える様々な草木、様々な物象が、そのまま、すべて仏の真法身でないものはない。それが水中の月の如しという意味だと言う。目前の存在は、水に映る月のように、そのまま真理の現われなのである。

道元は、また、同様のことを、鏡にたとえてもいる。『正法眼蔵』（古鏡）では、

「諸仏諸祖の受持し単伝するは、古鏡なり。同見同面なり。同像同鋳なり、同参同証す。胡来胡現、十万八千、漢来漢現、一念万年なり。古来古現し、今来今現し、仏来仏現し、祖来祖現するなり」

と語っている。諸々の仏祖が伝えてきた古鏡は、いつでも同じ面を映し、同じ姿を映し、同じ証りを映し出す。胡人が来れば胡人を映し、漢人が来れば漢人を映し、古人が来れば古人を現じ、今人が来れば今人を現じ、仏が来れば仏を現じ、祖が来れば祖を現ずるという意味である。曇りなき真理の鏡には、すべてのものがそのありのままの姿で映される。そこでは、すべてのものがそれ自身であると同時に、他と一つであり、他と一つであると同時に、それ自身である。そこには万物の実相が映っている。あらゆる存在は、真理の場にあって、その真の姿を現わし出しているのである。

道元が、『正法眼蔵』（現成公案）の中で、

「うを水をゆくに、ゆけども水のきはなく、鳥そらをとぶに、とぶといへどもそらのきはなし。しかあれども、うをとり、いまだむかしよりみづそらをはなれず」

と語っているのも、同じような意味に解することができる。魚は水の中にいるとともに、水も魚の中にあり、鳥は空の中にいるとともに、空も鳥の中にある。魚と水、鳥と空は一つである。ちょうどそれと同じように、個は場の中にあると同時に、場は個の中にあり、場と個は一つである。存在は真理の中にあり、真理は存在の中にあり、存在と真理は一つである。真理は存在であり、存在は真理である。

同様のことは、『正法眼蔵』（海印三昧）の中で、『華厳経』の海印三昧を独特に解釈することによっても語られている。諸仏祖には必ず海印三昧という境地がある。仏法を説く時も、証（さと）る時も、行（ぎょう）ずる時も、すべて海を遊泳するように、この三昧の境地の働きである。その功徳は、海の底に徹底して、深々と足をつけながら、海の上を行くのと同じように、仏法の深い真理に根差しながら、仏法を働くことにある。われわれの目前に働き出ているものは、すべて深い仏の命の働きであり、深い真理の働きである。この世界で生成消滅を繰り返す存在も、そのまま深い宇宙の真生命の働きなのである。

この宇宙に存在するすべての個体は、大宇宙を映す小宇宙である。万物は宇宙の中に働き出ているとともに、宇宙は万物の中に働き出ている。水の中に魚が住むとともに、魚の中に水が住む。空の中に鳥が住むとともに、鳥の中に空が住む。万物は宇宙の命の表現であり、宇宙の根源的生命の活動である。現実の存在は宇宙の真生命の現われであり、宇宙の真生命は現実の存在と別にあるのではない。本質は現象であり、真理は存在なのである。これが、解脱や悟りの世界に開かれてくる真理である。

（出典　『小林道憲〈生命（いのち）の哲学〉コレクション』4　ミネルヴァ書房 2016 京都　所収『続・宗教とは何か』第一章）